

Novell Sentinel™ 6.0 SP1

公開日: 2007 年 8 月 20 日

この Readme ファイルには、Novell®の Sentinel™ 6.0 SP1 に関連する情報が記載されています。Sentinel 6.0 SP1 は、全社的ネットワークのイベントの監視、レポート、および自動対処を支援すると同時に、セキュリティおよびコンプライアンスアクティビティに関するビューをリアルタイムで表示します。

このサービスパックは、すでにインストールされている Sentinel 6.0.0.0 に最新のソフトウェアフィックスおよび拡張機能を適用します。このサービスパックを適用する際は、Sentinel 6.0.0.0 をあらかじめインストールしておく必要があります。

サービスパックは、Sentinel™ 6.0.0.0 がすでにインストールされているすべてのマシン、クライアントおよびサーバにインストールする必要があります。対象となるマシンは、Sentinel サーバ、相関エンジン、Sentinel データベース、コレクタマネージャ、Sentinel コントロールセンター、コレクタビルダ、および Sentinel データマネージャなどです。

- Sentinel がまだインストールされていない場合は、Sentinel 6.0.0.0 インストーラを使用してインストールする必要があります。手順については、『Sentinel インストールガイド』を参照してください。
- Sentinel 5.x がインストールされている場合は、アップグレードインストーラを使用して Sentinel 6.0.0.0 にアップグレードする必要があります。手順については、『Patch Installation Guide』を参照してください。
- Sentinel 4.x がインストールされている場合は、Sentinel 6.0.0.0 インストーラを使用して Sentinel 6.0.0.0 をインストールする必要があります。一部のデータは、Sentinel 6.0.0.0 に移行できます。手順については、『Patch Installation Guide』を参照してください。

完全な製品マニュアルおよびこのファイルの最新版は、次の URL で入手できます。

<http://www.novell.com/documentation/sentinel6>

Sentinel 6.0 SP1 の新機能

Sentinel 6 SP1 は Sentinel のメンテナンスリリースです。Sentinel 6 SP1 には、バグフィックスに加え、少数の新機能および拡張機能が含まれます。

Red Hat Enterprise Linux 4 のサポート

Sentinel 6 SP1 では、x86_64 ハードウェアに Red Hat Enterprise Linux 4 のサポートが追加されています。

イベントソースの管理フレームワークに対する拡張機能

Sentinel 6 の新しいイベントソースの管理フレームワークは拡張され、パフォーマンスと使いやすさが向上しています。グラフィカルビューでは、子が 20 個より多い場合は自動的に子ノードが親に集約されて表示され、子ノードを管理するための専用フレームが追加されています。この機能により、多数のノードがあることでパフォーマンスが低下したり、画面上が乱雑になったりしないようにします。新しい「虫眼鏡」オプションを使用すると、全体の表示を変更することなく、画面の一部を拡大できます。

ファイルへの生イベントのエクスポート

すべてのコネクタノード上で、新しい設定オプションを使用してコネクタからの生データをテキストファイルに保存できます。このオプションを使用すると、元の形式のまま生データを保存できます。この機能は、Sentinel データコレクションのデバッグやテストを行う際にも便利です。

新しい Javascript ベースのコレクタエンジン

Sentinel 6 SP1 では、既存の Sentinel 独自のコレクタに加え、Javascript ベースのイベントコレクタを使用したコレクタの開発を可能にする新しいテクノロジーを導入しています。このテクノロジーは、Novell のお客様 およびパートナー様が業界標準のプログラミング言語を使用して高品質で機能豊富なコレクタを構築するためのプラットフォームを提供します。

Javascript で作成されたサンプルコレクタをご希望の場合は、Novell テクニカルサポートにお問い合わせください。

インストール

このドキュメントに記載されている手順は、このサービスパックのみに使用するインストール方法です。このサービスパックは、Sentinel™ 6.0.0.0 がすでにインストールされている環境でのみインストールしてください。

このサービスパックに付属している自動インストーラは、インストールにより置き換えられる既存のソフトウェアコンポーネントをバックアップします。バックアップファイルは、ESEC_HOME ディレクトリの下にある「SP<id>_<date>_bak」という名前のディレクトリに保存されます。ディレクトリ名の<id>はサービスパックの ID で、<date>はサービスパックの日付です (たとえば、「SP1_2007-08-08-GMT_bak」のような名前になります)。

サービスパックのインストール

メモ: サービスパックをインストールするマシンを完全にバックアップすることをお勧めします。これが不可能な場合は、少なくとも ESEC_HOME ディレクトリの内容をバックアップしてください。このバックアップは、予期しないインストールエラーからシステムを保護するために行います。

次の手順に従って、ソフトウェアとデータベースのサービスパックフィックスをインストールします。

1. 管理者(Windows の場合)またはルート(Unix の場合)としてログインします。
2. サービスパックの zip ファイルを展開します。
3. このマシンで実行されている次のような Sentinel アプリケーションをすべて閉じます。
 - Sentinel コントロールセンター
 - Sentinel コレクタビルダ
 - Sentinel データマネージャ
4. このマシンで実行されている次のような Sentinel サービスを停止します。

Windows の場合:

Windows サービスマネージャを使用して「Sentinel」サービスを停止します。

Solaris の場合:

```
$ESEC_HOME/sentinel/scripts/sentinel.sh stop
```

5. コマンドラインで、先ほど展開したサービスパックの最上位のディレクトリに移動します。
6. service_pack スクリプトを実行してサービスパックインストーラを起動します。

Windows の場合:

```
.\service_pack.bat
```

Unix の場合:

```
./service_pack.sh
```

7. メッセージが表示されたら、<Enter>キーを押してサービスパックのインストール手順を開始します。
8. Sentinel ソフトウェアがインストールされているすべてのマシンで、上記の手順を繰り返します。この手順は、Sentinel サーバおよびクライアントソフトウェアなどの

Sentinel ソフトウェアがインストールされているすべてのマシンで実行する必要があります。

9. Sentinel データベースがインストールされているマシンの場合、次の手順を実行して Sentinel データベースにパッチを適用します。

Oracle 上の Sentinel データベースの場合

Sentinel データベースの Oracle 用パッチスクリプトの大部分は、Java バージョン 1.5 および Oracle クライアントツールがインストールされているマシンで実行できます。Sentinel データベースのインスタンスが配置されているマシンとは別のマシンでスクリプトを実行する場合、Sentinel データベースのパッチスクリプトはパッチを適用するためにリモートで Sentinel データベースのインスタンスに接続します。ただし、Oracle インスタンスが配置されているマシン上で実行する必要があるスクリプトが 1 つだけあります。このスクリプトを実行する方法は、以下の手順に記載されています。

メモ: Sentinel 6 サービスパックのインストールを、Sentinel データベースのパッチが実行されているマシンで実行した場合、通常は Java バージョン 1.5 は `$ESEC_HOME/jre` ディレクトリにインストールされます。ただし、`$ESEC_HOME/jre` ディレクトリへのアクセス許可は、ルートまたは `esec` グループのユーザにのみ許可されます。したがって、現在のユーザがこのディレクトリにアクセスできるようにするには、ユーザを `esec` グループに追加するか、ディレクトリのアクセス許可を変更するか、Java の新しいインスタンスをインストールします。または、`esec` グループのメンバである `esecadm` ユーザとして、Sentinel データベースのパッチを実行できます。

Java バージョン 1.5 をインストールする必要がある場合は、次の Java Web サイトからダウンロードできます。<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/download.html> で、[ダウンロード] ボタン (*Java Runtime Environment (JRE) 5.0* というテキストの横にあります) をクリックします。

-
1. Sentinel サーバのプロセスが実行されていないことを確認します。
 2. `PrePatchDb_60sp1` スクリプトを実行します。このスクリプトは、Oracle Sentinel データベースのインスタンスが、Oracle DBA オペレーティングシステムのグループの許可を持つユーザとして配置されているマシン上で実行する必要があります。このスクリプトを実行するには、ディレクトリを、展開したサービスパックのディレクトリの下にある次のディレクトリに変更します。

メモ: このプリパッチスクリプトには Java は必要ありません。

db_patch/bin

3. 次のコマンドを入力します。

```
./PrePatchDb_60sp1.sh <database_name>
```

たとえば、次のように入力します。

```
./PrePatchDb_60sp1.sh ESEC
```

スクリプトが完了したら、次の手順に従ってメインデータベースのパッチのインストールを実行します。

4. Sentinel でサポートされている UNIX オペレーティングシステムが実行されているマシンにユーザとしてログインします。このマシンは、Oracle クライアントアプリケーションの *sqlplus* がその *PATH* にあり、環境変数 *ORACLE_HOME* が適切に設定されている必要があります。
5. 現在の環境変数をチェックして、java(バージョン 1.5)が *PATH* 上にあることを確認します。これは、コマンドラインで次のコマンドを実行することにより行うことができます。

```
java -version
```

上記のコマンドが成功しなかったか、java 1.5 をポイントしていない場合は、システム上で java 1.5 がインストールされている場所を見つけるか、java 1.5 をダウンロードしてインストールします。次に、java 実行可能ファイルがインクルードされるように *PATH* 環境変数を更新します。たとえば、java が次のディレクトリにインストールされているとします。

```
/opt/novell/sentinel6/jre
```

この場合、*PATH* 環境変数の先頭に次の文字列を追加します。

```
/opt/novell/sentinel6/jre/bin:
```

6. サービスパックの zip ファイルを展開します。
7. コマンドラインで、先ほど展開したサービスパックの最上位のディレクトリに移動します。
8. ディレクトリを、展開されたサービスパックの最上位ディレクトリの下にある次のディレクトリに変更します。

```
db_patch/bin
```

9. 次のコマンドを入力します。

```
./PatchDb.sh
```

10. プロンプトで、パッチを適用する Oracle Sentinel データベースのホスト名または静的 IP アドレスを入力します。

11. プロンプトで、パッチを適用する Oracle Sentinel データベースのポート番号を入力します。
12. プロンプトで、データベースのネットサービス名を入力します。
13. プロンプトで、パッチを適用する Oracle Sentinel データベースのデータベースサービス名を入力します。
14. プロンプトで、「esecdba」のユーザパスワードを入力します。スクリプトにより、入力情報の確認が行われ、データベースのパッチがインストールされます。
15. スクリプトによるパッチの適用が完了した後で、エラーが発生していないかどうかを確認します。エラーが発生していない場合、Sentinel データベースのパッチのインストールが完了しました。エラーが発生していた場合は、エラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再度実行します。

MSSQL 上の Sentinel データベースの場合(Windows 認証ログインとして「esecdba」を使用します)

1. Sentinel サーバプロセス が実行 されていないことを確認します。
2. まだログインしていない場合は、データベースマシンで「esecdba」 Windows ドメインユーザとしてログインします。
3. このマシンでサービスパックの zip ファイルをまだ展開していない場合は、zip ファイルを展開します。
4. コマンドプロンプトを開きます。
5. ディレクトリを、サービスパックを展開したディレクトリの下にある次のディレクトリに変更します。
`db_patch\bin`
6. コマンドを入力します。
`.\PatchDb.bat`
7. パッチをインストールする Sentinel データベースの SQL Server のホスト名または静的 IP アドレスを入力します。
8. SQL サーバデータベースのインスタンス名がある場合は、プロンプトで入力します。インスタンス名がない場合、<Enter>キーを押して次の手順に進みます。
9. プロンプトで、データベースのポート番号を入力します。
10. パッチをインストールする SQL Server Sentinel データベースの名前を入力します。
11. Windows 認証のオプション 1 を入力します。

12. スクリプトは、入力された情報を確認して認証情報が有効であれば、次の手順に進みます。
13. プロンプトで、言語文字セットのサポートオプションを入力します。
Unicode データベースの場合は「1」、ASCII データベースの場合は「2」と入力します。

メモ: 文字セットサポートのプロンプトでは、Sentinel 6.0 データベースを最初にインストールしたときに選択したオプションと同じオプションを選択します。データベースが最初に Sentinel 5.x を使用してインストールされていた場合、ASCII データベースのオプション 2 を選択します。

14. スクリプトによるパッチの適用が完了した後で、エラーが発生していないかどうかを確認します。エラーが発生していない場合、Sentinel データベースのパッチのインストールは完了しました。エラーが発生していた場合は、エラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再度実行します。

MSSQL 上の Sentinel データベースの場合(SQL 認証ログインとして「esecdba」を使用します)

1. Sentinel サーバのプロセスが実行されていないことを確認します。
2. データベースマシンにログインしていない場合はログインします。
3. このマシンでサービスパックの zip ファイルをまだ展開していない場合は、zip ファイルを展開します。
4. コマンドプロンプトを開きます。
5. ディレクトリを、サービスパックを展開したディレクトリの下にある次のディレクトリに変更します。

```
db_patch\bin
```
6. 次のコマンドを入力します。

```
.\PatchDb.bat
```
7. パッチをインストールする Sentinel データベースの SQL Server のホスト名または静的 IP アドレスを入力します。
8. SQL サーバデータベースのインスタンス名がある場合は、プロンプトで入力します。インスタンス名がない場合は、空のままにします。
9. プロンプトで、データベースのポート番号を入力します。
10. パッチをインストールする SQL Server Sentinel データベースの名前を入力します。
11. プロンプトで、SQL 認証のオプション 2 を入力します。

12. プロンプトで、「esecdba」のユーザパスワードを入力します。スクリプトにより、入力情報が検証されてデータベースのパッチが開始されます。
13. プロンプトで、言語文字セットのサポートオプションを入力します。Unicode データベースの場合は「1」、ASCII データベースの場合は「2」と入力します。

メモ: 文字セットサポートのプロンプトでは、Sentinel 6.0 データベースを最初にインストールしたときに選択したオプションと同じオプションを選択します。データベースが最初に Sentinel 5.x を使用してインストールされていた場合、ASCII データベースのオプション 2 を選択します。

14. スクリプトによるパッチの適用が完了した後で、エラーが発生していないかどうかを確認します。エラーが発生していない場合、Sentinel データベースのパッチの適用は完了しました。エラーが発生していた場合は、エラーを解決し、PatchDb ユーティリティを再度実行します。

このリリースで修正された不具合

DAT-160 – SQL Server 2005 での概要テーブルパーティションのインポート機能が修正されました。

DAT-216 – 概要テーブルの挿入が、SQL Server 2005 が P_MAX に書き込み中の場合でも成功するようになりました。

DAT-284 – Sentinel データマネージャの複数のジョブを競合せずに同時に実行できるようになりました。

DAT-294 – SQL Server 2005 ですでにアーカイブされているパーティションの「アーカイブとドロップ」を行うと、選択したアーカイブ解除されているパーティションをアーカイブした後で、選択したすべてのパーティションをドロップするようになりました。

DAT-305 – SQL Server 2005 で、高いイベント率でも集約が適切に機能します。

DAT-306 – SQL Server 2005 で、アーカイブ先が無効である場合にパーティションのアーカイブとドロップを行うと、エラーになります。この場合、パーティションがアーカイブされずにドロップされることはありません。

SEN-4066 – イベントソースの管理の「ステータスの表示」許可しか持たないユーザは、複数のノードが同時に選択されている場合でも、それらのノードの開始および停止を行えなくなりました。

SEN-5284 – イベントソースの管理で子ノードを開始すると、その親ノードも開始するようになりました。イベントソースの管理で親ノードを停止しても、その子ノードは停止しません。

SEN-5843 - プロキシを通じて Sentinel サーバに接続するように設定してコレクタマネージャをインストールするとき、DAS を再起動する必要がなくなりました。

SEN-6198 – イベントソースを持たないコレクタ(ODBC コレクタなど)については、イベントソースの管理 GUI で [信頼イベントソース時刻] を設定できません。「信頼イベントソース時刻」をコレクタレベルで設定することが可能になり、すべての子ノードに適用されるようになりました。

SEN-6532 – 「スクラッチパッドの表示」許可しか持たないユーザは、スクリプトをプラグインリポジトリにインポートできなくなりました。

SEN-6591 – 複合ルールの作成中にサブルールの変更または削除を実行し、[キャンセル] ボタンをクリックした場合、変更または削除がロールバックされるようになりました。

SEN-6629 – コレクタスクリプトプラグインのパラメータが変更され、その変更が Sentinel にインポートされたとき、そのプラグインを使用する展開済みコレクタのパラメータが直ちに更新されるようになりました。

SEN-6703 – イベントソースサーバとコネクタ両方への接続を表示するために使用されるイベントソース。大量のイベントソースがある場合、接続は、イベントソースとそのコネクタの間およびイベントソースサーバとそのコネクタの間で表示されるようになりました。イベントソースサーバは、インタフェース内でイベントソースのノードに接続されなくなりました。

SEN-6747 – 511_SP2_06_GA からのコレクタのインポートが正しく機能するようになりました。

SEN-6779 – ユーザは、サブルールを作成しないと シーケンスルールを作成できなくなりました。

SEN-6783 – SQL Server 2005 のユーザー一覧にユーザがすでに登録されている場合でも、Sentinel コントロールセンターで Windows 認証ユーザを作成できるようになりました。

SEN-6784 – 展開された相関ルールの選択やコピーが可能になりました。意図的に、展開された相関ルールはこれまでどおり編集することはできません。

SEN-6818 – イベントソースの管理の [属性フィルタ] の [エラー] チェックボックスに、フィルタが適用されたノードが正しく表示されるようになりました。

SEN-6821 – Sentinel データマネージャのコマンドラインインタフェースの updateMapData コマンドは、削除されました。マップを更新するには、GUI で [Sentinel コントロールセンター] > [Admin] > [マッピングの環境設定] の順に選択するか、%ESEC_HOME%\MapUpdateUtility.bat または \$ESEC_HOME/MapUpdateUtility.sh のどちらかを使用できます。

SEN-7239 – [サーバビュー] の [ビューの切り替え] が、予期したとおりに機能するようになりました。

このリリースの既知の問題と制限事項

インストールに関する問題

SEN-5895 – インストーラがパスに特殊文字を含むディレクトリから実行される場合、Sentinel のインストールが失敗します。この問題を回避するには、インストーラディレクトリをパスにスペースが含まれないディレクトリにコピーします。

SEN-3994、SEN-5524 – Windows の場合のみ。Sentinel コンポーネントが、名前に ASCII 以外の文字が使用されているディレクトリにインストールされている場合、Sentinel コントロールセンターおよび Sentinel アンインストールのショートカットが動作しません。Sentinel コントロールセンターの問題を回避するには、%ESEC_HOME%\bin\control_center.bat を実行します。アンインストールの問題を回避するには、『Sentinel インストールガイド』に記載されている手動によるアンインストール手順を実行します。

SEN-5610 – SLES 10 での Sentinel データベースのアンインストールにより、インストール中に作成されたデータベースファイルの一部が削除されません(*.dbf、*.ctl、*.log)。回避するには、『インストールガイド』に記載されている手順を使用してこれらのファイルを手動で削除します。

SEN-6041 – Sentinel では、Oracle の dbstart および dbshut スクリプトの問題のため、Oracle 10 データベースを開始できません。Solaris 10 および Red Hat }3 上の 2 つの Oracle 10 用スクリプトの変更手順は、『インストールガイド』に記載されています。SUSE Linux Enterprise Server 10 では変更の必要はありません。

SEN-6542 – Oracle の場合のみ。DAS および Sentinel データベースをインストールするとき、インストーラの実行言語がインストール済みの Oracle ソフトウェアによってサポートされている必要があります。たとえば、DAS および Sentinel データベースをインストールするための Sentinel インストーラがフランス語で実行され、Oracle データベースが英語のみをサポートしてインストールされている場合は、das_query_*.log ファイルに NLS エラーが書き込まれます。Novell のサポートサイト上で TID 3306569 の記事を参照してください。

SEN-6881 – ユーザが通信ポートのプロンプトから機能選択ページまで [戻る] をクリックし、インストールするコンポーネントの一部のチェックボックスをオフにした場合、不要な通信ポートのプロンプトが表示され続けることがあります。この問題を回避するには、そのポートが、インストールするように現在選択されているコンポーネントでは使用されない可能性がある場合で

も、正しいポートを指定します。別のコンポーネントが後でインストールされた場合、ポートはその時点で使用されるようになります。

SEN-6882 – プロキシ経由で Sentinel サーバに接続するように設定してコレクタマネージャをインストールするときに誤ったホスト名またはポートが入力された場合、「信頼できるクライアントを登録する許可がある Sentinel ユーザ名とパスワード」に対するプロンプトまでインストールを続行するとエラーが発生します。インストーラで戻り、ホスト名またはポートを編集した場合、configuration.xml は新しい情報で更新されず、信頼できるクライアントの登録は失敗します。回避するには、インストーラの画面に信頼できるクライアントの登録プロンプトが表示されているときに、ESEC_HOME/config/configuration.xml ファイル内のホスト名またはポートを手動で編集します。信頼できるクライアントの登録ユーザ名とパスワードが再入力されると、インストーラは configuration.xml ファイルの変更を取り入れ、適切に続行します。

SEN-6884 – プロキシ接続するように設定し、GUI モードのインストーラを使用してコレクタマネージャをインストールすると、ユーザには DAS プロキシとの信頼できる登録を行うためのオプションが3つ提供されます。コレクタマネージャが動作するためには、ユーザは [永久的に受諾] ([受諾] ではなく) を選択する必要があります。

SEN-6885 - Windows の場合のみ。Sentinel アプリケーションユーザ(esecapp)に対して Windows 認証を使用すると、データベースおよびその他の DAS 以外のプロセスがインストールされる場合に Sentinel サービスは Windows 認証ユーザとしてインストールするように設定されますが、必要なパスワードが設定されません。そのため、サービスは起動しません。回避するには、Windows サービスマネージャを使用して、「ローカルシステム」アカウントとして実行するようにサービスを設定します。DAS を実行していない場合は、サービスを Sentinel アプリケーションユーザ(esecapp)として実行する必要はありません。

SEN-6886 - Windows の場合のみ。他の Sentinel サーバコンポーネントがすでにインストールされているマシンに DAS コンポーネントが追加され、Sentinel アプリケーションユーザ(esecapp)が Windows 認証を使用する場合、DAS のインストール完了後、Sentinel サービスが「ローカルシステム」ユーザとして実行するように誤って設定されたままになります。回避するには、Windows サービスマネージャを使用して、Sentinel アプリケーションユーザとして Sentinel サービスを実行するように手動で設定します。

SEN-6920 – インストール時に、一部の画面(特に、ユーザ認証の画面)が完全に表示されない場合があります。この問題を回避するには、InstallShield ウィザードで前に戻ったり次に進んだりするか、ウィンドウの最小化や最大化を行ったりすることにより、ウィザード画面を再表示します。

その他の問題

DAT-280 – Sentinel データマネージャが長時間開いたままになっていると、「ORA-01000: 最大オープン・カーソル数を超過しました。」というエラーが発生します。この問題を回避するには、作業を終えた SDM を閉じます。

DAT-325 – Oracle の場合のみ。スケジュールされたパーティションジョブの時間を変更すると、ジョブはスケジュールされた時刻に一度実行された後、インストール時に指定した時刻に逆戻りします。

SEN-3515 – ユーザは、許可を与えられていない場合でも、iTRAC プロセスを終了させることができます。

SEN-3897 – サーバビューマネージャは、特定のマシンにインストールされていないプロセスのステータスを NOT_INITIALIZED と表示します。たとえば、Windows 上の Sentinel は、「UNIX Communication Server」プロセスを NOT_INITIALIZED と表示し、UNIX 上の Sentinel は「Windows Communication Server」プロセスを NOT_INITIALIZED と表示します。NOT_INITIALIZED というステータスで表示されるプロセスは無視してください。

SEN-4617 UNIX の場合のみ。Sentinel 管理ユーザ(esecadm)のみが Sentinel コントロールセンターを実行できます。他のユーザが Sentinel コントロールセンターを実行できるようにするには、Novell テクニカルサービスの Web サイトで、「On UNIX only, only the Sentinel Administrative User (esecadm) is able to run the Sentinel Control Center」(TID #3515705)というタイトルの技術情報ドキュメント(TID)を参照してください。

SEN-5931 – デバッグモードでコレクタが停止状態に達した場合、[ステップイン]、[一時停止]、および [停止] ボタンは使用可能な状態ですが、機能しません。回避するには、デバッグを閉じて、再び開きます。

SEN-6182 – 実行中のコレクタスクリプトが停止状態に達した場合、コレクタの子ノードが停止しません。このため、コレクタは停止されますが、そのコネクタとイベントソースは依然として実行中であることがイベントソースの管理のライブビューで示されます。イベントは処理されません。回避するには、コレクタを右クリックし、手動で停止します。

SEN-6265 – コレクタの停止によって、その子コネクタおよびイベントソースが常に停止されるとは限りません。

SEN-6397 - 相関アクションマネージャの電子メールの送信アクションでフォーマット名を「xml」に設定したとき、電子メールの本文は名前と値のペア形式で送信されます。

SEN-6398 - 電子メールの送信アクションが相関ルールに対して起動されたとき、電子メールの添付ファイルが空白です。

SEN-6429 - 役割マネージャの [Admin] タブで大文字と小文字の区別だけが異なる 2 つの役割名 (たとえば、Admin と admin) を作成した場合、一方の役割に対するユーザの追加および削除はもう一方の役割にも影響します。回避するには、すべての役割名が大文字と小文字の区別以外にも異なるようにします。

SEN-6473 - イベントソースの管理のライブビューで、生データのタップからノードにフィルタ条件を追加し、[OK] ボタンを選択して新しいフィルタ条件を保存した場合、ノードの状態が生データのタップが開かれる前の状態に戻ります。

SEN-6573 - 複合、集約、またはシーケンスルールで属性リストのすべての属性が「グループ基準」フィールドとして選択されている場合、「RuleLgが無効です」メッセージが表示されます。

SEN-6608 - マッピングサービスの GUI で最上位の「マップ」フォルダに追加されたマップは、更新が行われるまで表示されません。この問題を回避するには、新しいマップをサブフォルダに作成します。

SEN-6698 - 相関ルール言語は e.all 演算子をサポートしません。以前のバージョンの Sentinel からインポートされた、e.all を使用するルールは動作しません。

SEN-6701 - イベントソースサーバに関連するノードの移動または複製は、直接であろうと、親または子を通じてであろうと、失敗します。この問題を回避するには、ノードを一度エクスポートしてから、そのノードをインポートします。

SEN-6732 - [イベントソースへの接続] ウィザードの [ヘルプ] ボタンが機能しません。回避するには、[コレクタの追加] ウィザードや [コレクタの編集] ダイアログなど、他のダイアログの [ヘルプ] ボタンをクリックします。

EN-6800 - ダイナミックリストを参照する inlist 演算子を含む相関ルールが、Sentinel にインポートされた後、機能しません。この問題を回避するには、相関ルールをインポートせずに、inlist を含めた相関ルールを作成し直します。

SEN-6895 - Windows の場合のみ。Unicode 以外のデータベースがインストール時に選択された場合、GUI にラテン文字が適用されません。

SEN-6896 - ほとんどのボタンにはニーモニック(ホットキー)が存在しません。

SEN-6932 - Sentinel コントロールセンターの埋め込みブラウザは、レポートを正しくフォーマットしません。この問題を回避するには、外部ブラウザを使用するように Sentinel コントロールセンターを設定します。

SEN-7190 - 改行文字が含まれている相関ルールをインポートした場合、この相関ルールを相関エンジンマネージャで展開したり読み込んだりすることはできません。この問題を回避するには、展開する前に、編集モードでルールを開いて保存します。

SEN-7238 – ユーザが複数のグローバルフィルタまたはカラーフィルタを追加し、[X] ボタンをクリックし、[変更の保存] ダイアログで [いいえ] を選択した場合に、グローバルフィルタまたはカラーフィルタを再度開くと、これらのフィルタが依然として表示されます。この問題を回避するには、Sentinel コントロールセンターを再起動します。

SEN-7246 – ブラウザで開かれているイベントテーブル(アクティブビューまたは履歴イベントクエリなど)から、右クリックコマンドを実行すると、実行時例外が生成されます。

SEN-7257 – Sentinel 5.1.3 システムで展開されていた一部のコレクタは、手動で再度展開する必要があり、一部変更する必要がある場合もあります。『*Sentinel ユーザガイド*』および Sentinel マニュアルページの「*Migrating to Sentinel 6*」セクションの下にあるドキュメントでは、役に立つ情報が提供されています。これらのドキュメントは次の Web サイトで検索できます。

<http://www.novell.com/documentation/sentinel6>

SEN-7413 – ファイルコネクタを使用して Javascript コレクタをデバッグすると、入力ファイルの末尾に達したときにデバッガが「`RuntimeException - Sentinel-EOF`」をスローします。

WIZ-1839 – コレクタスクリプト言語の ALERT コマンドでは、ConnectorID (RV23)、EventSourceID (RV24)、および TrustDeviceTime フィールドは自動的に送信されません。回避するには、ALERT コマンドを使用するコレクタ内の警告メッセージにこれらのフィールドを追加するか、EVENT コマンドを使用するようにコレクタを更新します。コードサンプルについては、『*Sentinel Reference Guide*』を参照してください。

保証と著作権

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、本書の内容または本書を使用した結果について、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。また、本書の商品性、および特定の目的への適合性について、いかなる黙示の保証も否認し、排除します。

また、本書の内容は予告なく変更されることがあります。

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、すべてのノベル製ソフトウェアについて、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。またノベル製ソフトウェアの商品性、および特定の目的への適合性について、いかなる黙示の保証も否認し、排除します。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、ノベル製ソフトウェアの内容を変更する権利を常に留保します。

本契約の下で提供される製品または技術情報はすべて、米国の輸出規制および他国の商法の制限を受けます。お客様は、すべての輸出規制を遵守し、製品の輸出、再輸出、または輸入に必要なすべての許可または等級を取得するものとします。お客様は、現在の米国の輸出除外リストに掲載されている企業、および米国の輸出管理規定で指定された輸出禁止国またはテロリスト国に本製品を輸出または再輸出しないものとします。お客様は、取引対象製品を、禁止されている核兵器、ミサイル、または生物化学兵器を最終目的として使用しないものとします。

Novellソフトウェアのエクスポートの詳細については、<http://www.novell.com/info/exports> を参照してください。弊社は、お客様が必要な輸出承認を取得しなかったことに対し如何なる責任も負わないものとします。

Copyright © 1999-2007 Novell, Inc. All rights reserved. 本ドキュメントの一部または全体を無断で複写・転載することは、その形態を問わず禁じます。

米国Novell, Inc.は、本文書に記載されている製品に統合されている技術に関する知的所有権を保有します。特に限定されることなく、これらの知的所有権は、<http://www.novell.com/company/legal/patents/>に記載されている1つ以上の米国特許、および米国ならびにその他の国における1つ以上の追加特許または出願中の特許を含む場合があります。

Novell, Inc.

404 Wyman Street, Suite 500

Waltham, MA 02451

U.S.A.

www.novell.com

Novell の商標

Novellの商標については、<http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html>のNovell Trademark and Service Mark Listを参照してください。

サードパーティーの資料

サードパーティ各社の商標は、所有者であるそれぞれの会社に所属します。

サードパーティーの保証と著作権

この製品には、LGPL ライセンスに基づいて使用できる以下のオープンソースプログラムが含まれている場合があります。このライセンスのテキストは Licenses ディレクトリにあります。

- edtFTPj-1.2.3 は、Lesser GNU Public Licenseに基づいて使用許諾され項、制限事項などの詳細については、<http://www.enterprisedt.com/products/edtftpj/purchase.html>を参照してください。
- Esper: Copyright © 2005-2006, Codehaus.
- jTDS-1.2.jarは、Lesser GNU Public Licenseに基づいて使用許諾されています。免責事項、制限事項などの詳細については、<http://jtds.sourceforge.net/>を参照してください。
- MDateSelector: Copyright © 2005, Martin Newstead. Lesser General Public Licenseに基づいて使用許諾されています。免責事項、制限事項などの詳細については、<http://web.ukonline.co.uk/mseries>を参照してください。
- Enhydra Shark: Lesser General Public Licenseに基づいて使用許諾されています。ライセンスは、<http://shark.objectweb.org/license.html>で入手できます。
- Tagish Java AuthenticationモジュールおよびAuthorization Serviceモジュール: Lesser General Public Licenseに基づいて使用許諾されています。免責事項、制限事項などの詳細については、<http://free.tagish.net/jaas/index.jsp>を参照してください。

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>)により開発され、Apache License Version 2.0 (「ライセンス」)に基づいて使用許諾されたソフトウェアが含まれている場合があります。このライセンスの原文については、Licensesディレクトリまたは <http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0>を参照してください。適切な法律または書面による合意によって要求された場合を除き、このライセンスの下で配布されるソフトウェアは「現状のまま」配布され、明示暗示を問わずいかなる種類の保証や条件もありません。特定の言語については、このライセンスの下で許可や制限を規定するライセンスを参照してください。

該当するオープンソースプログラムは次のとおりです。